

しろ ちゆう しん お城を中心としたまちづくり

《掛川城を中心としたまち》



太鼓櫓

◆太鼓櫓は音の時計台

元は旧市役所の高台にあったもので、市の指定文化財です。時を知らせるため、時間になると太鼓が打ち鳴らされました。掛川城御殿の玄関に当時使われた大太鼓があり、毎年6月10日の時の記念日に打ち鳴らし式を行っています。

掛川の町は、城の中と近くに武士が住み、商人や職人が逆川から南に町をつくる城下町でした。このまちなかを東海道が東西に通り、旅籠屋や商店などが軒を連ねる宿場町でもありました。

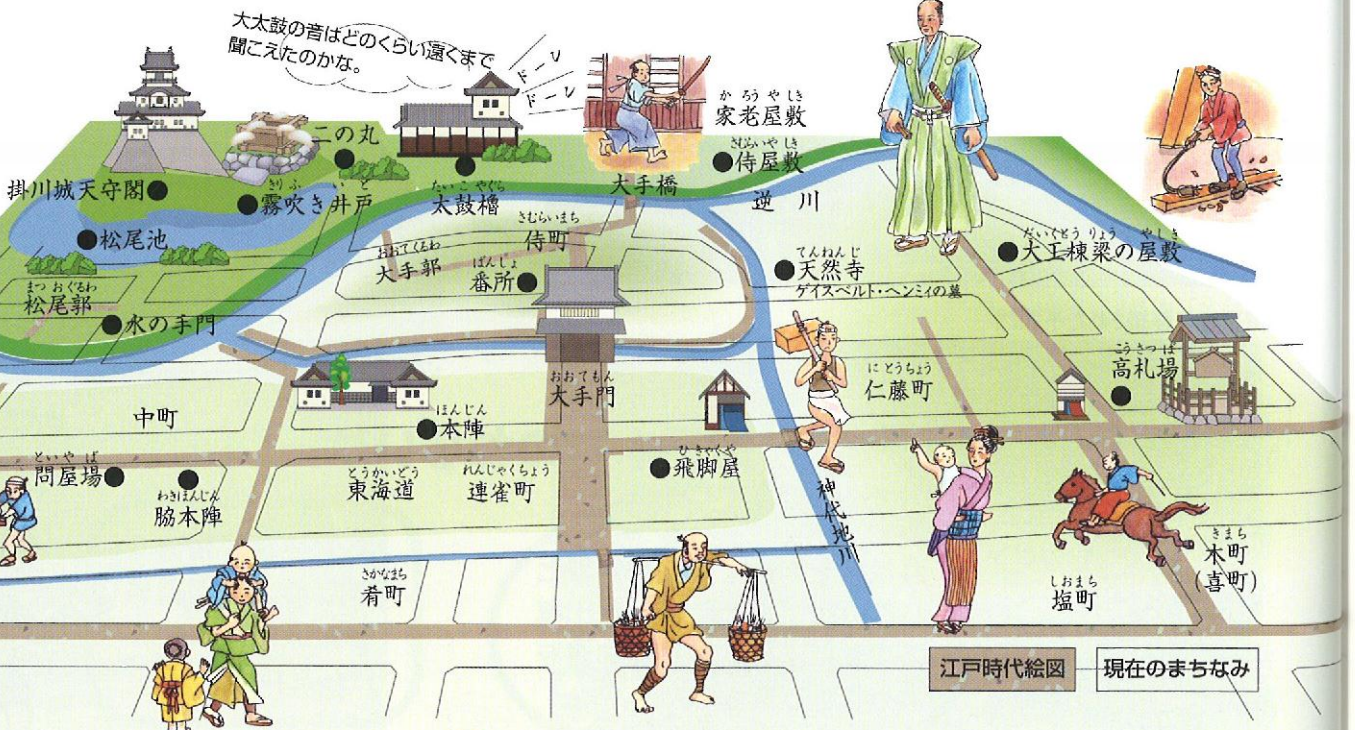


大手門(今の大手門は昔の位置より50m北に建っています。)

◆大手門

大手門は、掛川城の正門で、東海道に面して建てられていました。不明だった位置と規模が、発掘調査で明らかになりました。そこで、全国で初めて大手門が復元されました。

? 調べてみよう



こだわりっぱの前で、今のまちなみと昔の絵図を重ねた絵図が見られるよ。

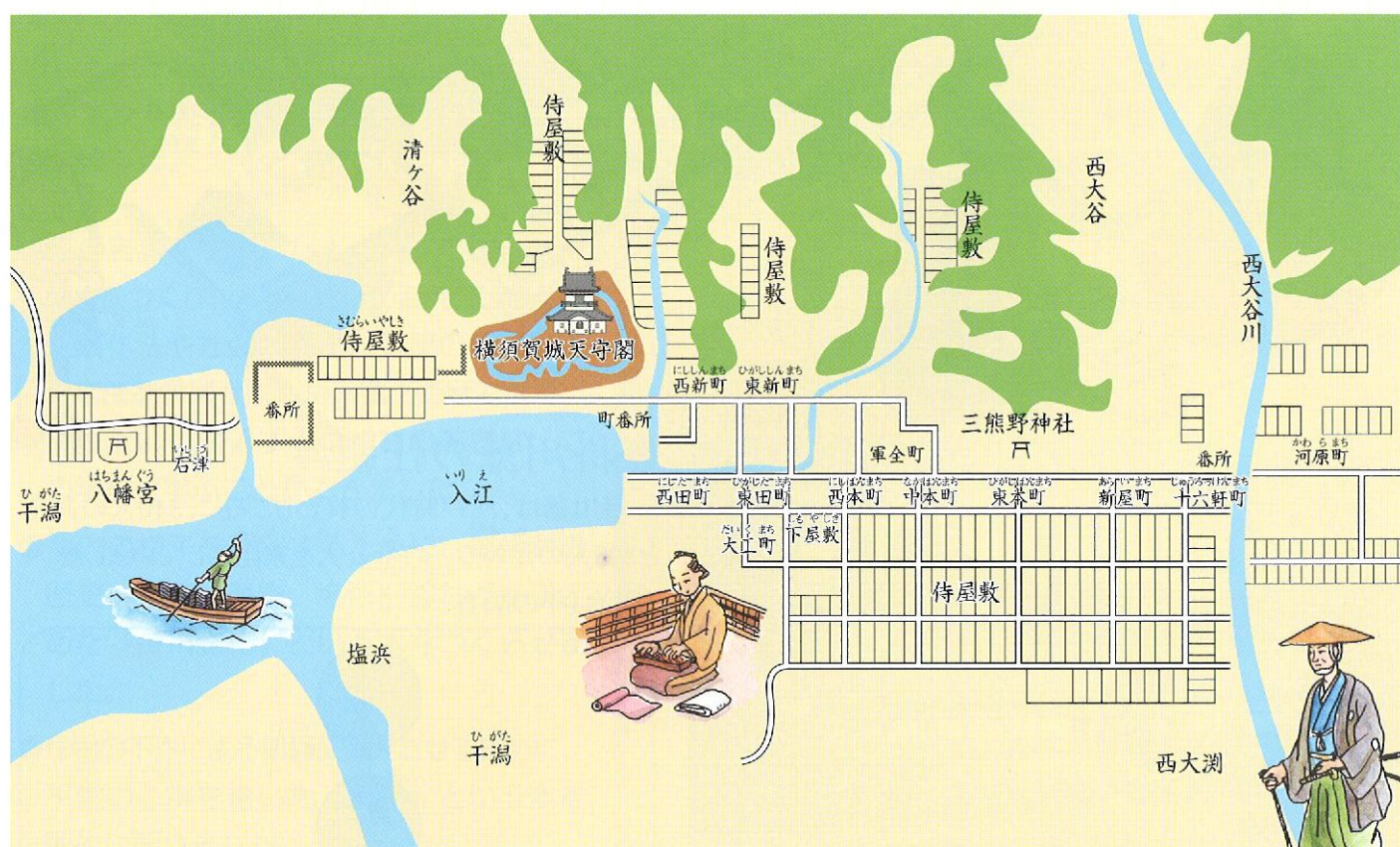
《横須賀城を中心としたまち》

横須賀の町は、北側に山があり、城の周り^{ざわらいやしほ}と東側に侍屋敷や商人や職人の住む町が広がり、城のすぐ前が入り江となっていました。整備された道とともに、舟による海上交通も、町の発展のために大きな力になりました。

今も残っている町の名前がたくさんあります。



今のまちのようすとくらべてみよう。



横須賀町番所^{まちばんしょ}は、横須賀城があった頃、城内に出入りする人を監視する目的で造られた建物で、現在は市指定文化財として、大須賀支所北側に移築されています。明治維新とともに横須賀城は廃城となり、城の建物等ほとんどがとりこわされましたが、この町番所の建物だけは奇跡的に残りました。

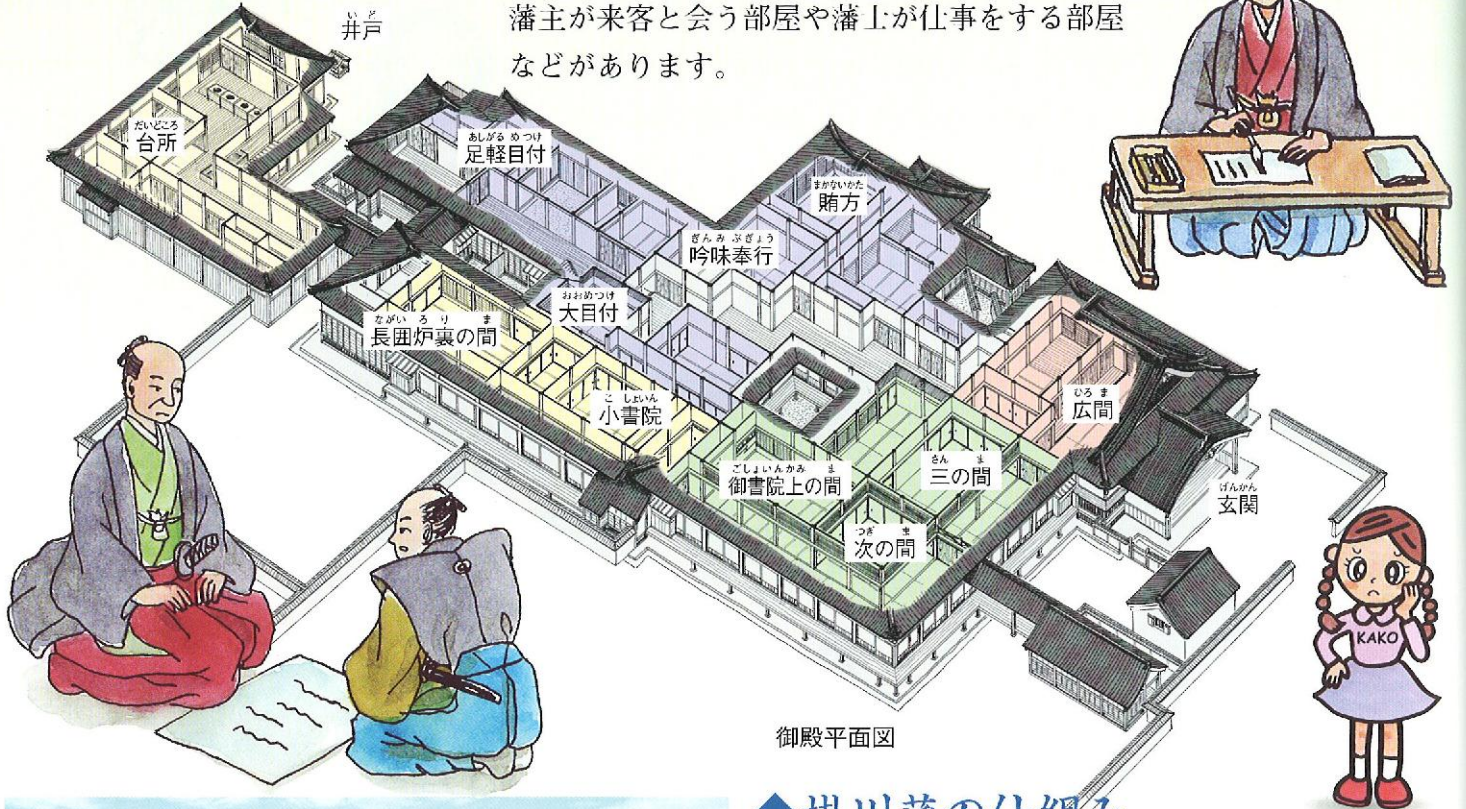
建物の屋根の大棟と隅棟には、城主西尾家の紋所である「櫛松」を表した鳥衾付の鬼瓦がふかれ、昔のようすを伝えています。



横須賀町番所(西大淵)

◆掛川城御殿

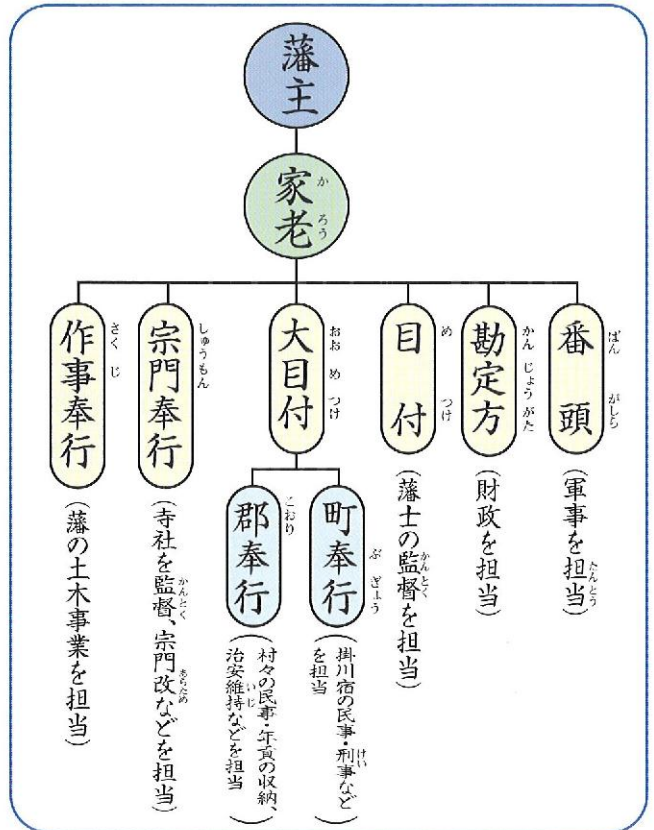
現在の御殿は19世紀中ごろに再建された建物で、藩主が来客と会う部屋や藩上が仕事をする部屋などがあります。



御殿平面図

◆掛川藩の仕組み

掛川藩は、江戸時代の終わりごろに、340人の武士と305人の足軽などの奉公人を家臣にしていました。(明治4年の調査)



掛川城御殿全景



御書院上の間 床の間と棚



次の間

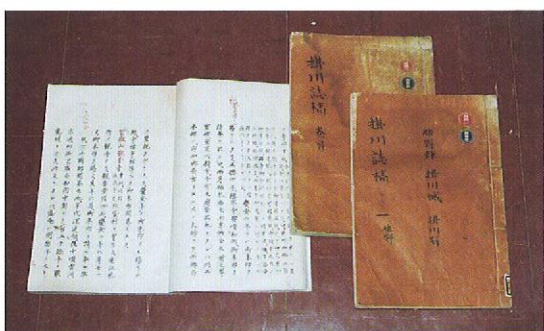
◆太田氏の政治

1746年から1868年（明治元年）まで掛川藩主であった太田氏は、寺社奉行や老中などの幕府の重要な職を勤めつつ、自分の領地である藩の政治にも力を注ぎ、次のようなことを行いました。



掛川藩最後の藩主太田資美

- 藩の若者をすぐれた人材に育てるために学校をつくり、剣や槍などの武芸のほか、礼儀作法や社会の秩序、中国の歴史などの学問を学ばせました。藩士だけでなく、学びたいと希望する町や村の若者は、この学校で学ぶことができました。
- 藩内の様子を理解するために、宿や村の歴史、人口、産物、名所旧跡などをまとめた『掛川誌稿』という本をつくらせました。
- 作物の不作による飢饉に備えさせるために、平常の心得を書いた『農論』という本を藩内に配りました。
- 不作で貧しくなった農村を立て直すために、報徳を取り入れて、村人に開墾させたり、ため池を直させたりして、収穫が増えるようにしました。



『掛川誌稿』（大日本報徳社所蔵）

◆山内一豊以降の歴代城主

	城主名	入城年	在城年数	禄高	幕府の要職と移動先
初代	山内一豊	1590	10		土佐（高知県）
二代	松平定勝（さだかつ）	1601	6	三万石	伏見城代（京都府）
三代	松平定行（さだゆき）	1607	10	三万石	桑名（三重県）
四代	安藤直次（なおつぐ）	1617	2	二万八千石	紀伊徳川家老（和歌山県）
五代	松平定綱（さだつな）	1619	4	三万石	淀（京都府）
六代	朝倉宣正（のぶまさ）	1625	6	二万六千石	
七代	青山幸成（ゆきなり）	1633	2	二万六千石	尼崎（兵庫県）
八代	松平忠重（ただしげ）	1635	4	四万石	
九代	松平忠俱（ただとも）	1639	0	四万石	飯山（長野県）
十代	本多忠義（ただよし）	1639	5	七万石	村上（新潟県）
十一代	松平忠晴（ただはる）	1644	4	三万石	亀山（京都府）
十二代	北条氏重（うじしげ）	1648	10	三万石	
十三代	井伊直好（なおよし）	1659	13	三万五千石	
十四代	井伊直武（なおたけ）	1672	22	三万五千石	
十五代	井伊直朝（なおとも）	1694	11	三万五千石	
十六代	井伊直矩（なおのり）	1705	0	三万五千石	与板（新潟県）
十七代	松平忠喬（ただたか）	1706	5	四万石	尼崎（兵庫県）
十八代	小笠原長瀬（ながひろ）	1711	28	六万石	
十九代	小笠原長庸（ながつね）	1739	5	六万石	
二十代	小笠原長恭（ながゆき）	1744	2	六万石	棚倉（福島県）
二十一代	太田資俊（すけとし）	1746	17	五万石	（寺社奉行）
二十二代	太田資愛（すけちか）	1763	42	五万石	（老中）
二十三代	太田資順（すけのぶ）	1805	3	五万石	
二十四代	太田資言（すけとき）	1808	2	五万石	
二十五代	太田資始（すけもと）	1810	31	五万石	（老中）
二十六代	太田資功（すけかつ）	1841	21	五万石	（寺社奉行）
二十七代	太田資美（すけよし）	1862	6	五万石	芝山（千葉県）

（太字は幕府における要職）



太田家家臣の墓（正願寺 仁藤）



調べてみよう



◆横須賀城の歴代城主

	城主名	入城年	在城年数	禄高	幕府の要職と移動先
初代	大須賀五郎左衛門尉康高(ごろうざえもんのじょうやすたか)	1580	8	三万石	
二代	大須賀五郎左衛門忠政(ごろうざえもんだまさ)	1588	3	三万石	上総久留里(千葉県)
三代	渡瀬左衛門佐繁詮(さえもんのすけしげあき)	1591	4	三万石	
四代	有馬玄蕃頭豊氏(氏長)(げんばのかみとようじ)(うじなが)	1595	6	三万石	丹波福知山(京都府)
五代	松平(大須賀)出羽守忠政(でわのかみただまさ)	1601	6	五万五千石	
六代	松平(大須賀)五郎左衛門忠次(ただつぐ)	1607	8	五万五千石	上野館林(群馬県)
七代	松平常陸介頼宣(駿府城主)(ひたちのすけよりのぶ)	1615	4	駿遠太守五十万石	和歌山
八代	松平(能見)大隅守重勝(のうみ)(おおすみのかみしげかつ)	1619	1	二万六千石	
九代	松平(能見)丹後守重忠(のうみ)(たngoのかみしげただ)	1620	3	二万六千石	出羽上の山(山形県)
十代	井上主計頭正就(かずえのかみまさなり)	1623	5	五万二千石	(老中)
十一代	井上河内守正利(かわちのかみまさとし)	1628	17	四万五千石	常陸笠間(茨城県)
十二代	本多越前守利長(えちぜんのかみとしなが)	1645	37	五万石	出羽村山(山形県)
十三代	西尾隠岐守忠成(おきのかみただなり)	1682	31	二万五千石	
十四代	西尾隠岐守忠尚(ただなお)	1713	47	三万五千石	(老中)
十五代	西尾主水正忠需(もんどのしょうただみつ)	1760	22	三万五千石	
十六代	西尾隠岐守忠移(ただゆき)	1782	19	三万五千石	
十七代	西尾隠岐守忠善(ただよし)	1801	27	三万五千石	
十八代	西尾隠岐守忠固(ただかた)	1829	14	三万五千石	
十九代	西尾隠岐守忠受(たださか)	1843	18	三万五千石	
二十代	西尾隠岐守忠篤(ただあつ)	1861	7	三万五千石	安房花房(千葉県)

(太字は幕府における要職)

◆初代城主

徳川家康に認められた大須賀五郎左衛門尉康高

おおすかごろうざえもんのじょうやすたか

三河(今の愛知県)に生まれた康高は、とても勇かんで、さまざまな合戦に参加して手がらをたてました。徳川家康にその力を認められて家来になりました。

横須賀城主になったあとも、姉川の戦いや長篠の合戦に参加して活躍しました。また、堤ぼうをつくって田畑を開発するなど、領内の農業の発展に力をそそぎました。



大須賀康高



大須賀康高、第二代忠政の墓
(撰要寺 山崎)

◆第四代城主

重い年貢で人々を苦しめた有馬玄蕃頭豊氏

あり ま げん ぼのかみ とよ うじ

豊臣秀吉の家来であった豊氏は、1595年に第四代城主となりました。このころは豊臣秀吉が全国できびしい検地をおこなっていました。豊氏も、領地の田畑の面積を細かく測り、人々は重い年貢に苦しめられました。

当時は、田畑の面積を測るために縄が使われ、領主が玄蕃頭だったことから、「玄蕃縄」とよばれ、その後もきびしい測量をあらわす名前として人々に語りつがれました。

どんなお殿様がいたのかな？



◆第十三代～二十代城主

文化・スポーツで人々を喜ばせた西尾家の城主

第十四代城主西尾忠尚は、西尾家を発展させた人として有名です。幕府の寺社奉行や奏者番などをつとめ、その活躍が認められて、若年寄や老中などの要職に任ぜられました。

勇ましいことを好み、相撲の力士をやとって相撲の試合を人々に見せたり、江戸から花火師を呼んで、人々に花火を見せたりしました。また、参勤交代で江戸に行ったときに、家来に江戸祭礼囃子を習わせ横須賀の地に伝えました。これが、いまでも三熊野神社の春の大祭で使われる山車の囃子となっています。



西尾家の墓（龍眠寺 西大淵）



三熊野神社の大祭



三熊野神社

第十七代城主西尾忠善は、絵画や蘭学など新しい文化に高い関心を持っていました。また、第十九代城主忠受は、絵画に親しみ、その直筆の絵である『六歌仙の図』は、現在三熊野神社に奉納してあります。

掛川藩主太田家の絵師

◆村松以弘 (1772~1839)

村松以弘は、掛川宿十九首に生まれ、子どものころから絵をかくことにすぐれていました。

以弘は各地に師を求めて絵を学びました。修業の途中で出会った谷文晁とのかかわりが以弘の作品の基礎をつくりました。文晁のもとで学んだ以弘は、やがて掛川にもどり掛川藩主太田家の絵師となり、多くの作品を残しました。代表的な作品に「白糸瀑図」があります。遠近法を取り入れつつありのままを忠実に描写した作品はまるで写真のように見えます。

以弘の活躍は、この地域の画家に大きな影響をおよぼしました。



以弘の代表作：白糸瀑図（個人所蔵）



村松以弘筆 人物画
(資料提供 伊藤鋼一郎氏)

掛川の武士の子弟を教育した

◆松崎慊堂 (1771~1844)

慊堂は肥後国(熊本県)に生まれ、10才で僧になりましたが、儒学を学ぶために江戸に出て、幕府の学問所昌平齋に学びました。

1802年、31才で掛川藩主に招かれて藩校の教授となり、子弟の教育にあたりました。

1811年、朝鮮通信使が対馬に来た時には、学識の深さと広さ、人格が評価されて、応接役を務めました。

日坂に住んだ文化人

◆大須賀鬼卵 (1744~1823)

河内国(大阪府)に生まれ、三島・駿府などを転々としたのち日坂に移り住みました。鬼卵は、たばこ屋を営むかわら、俳句、狂歌を好み、絵もかきました。

1803年、東海道の宿場ごとの文化人を載せた『東海道人物志』をあらわしました。日坂で亡くなり、長松院(大野)に葬られました。



大須賀鬼卵の墓(長松院 大野)



鬼卵がかいた長松院密仙和尚(長松院所蔵)

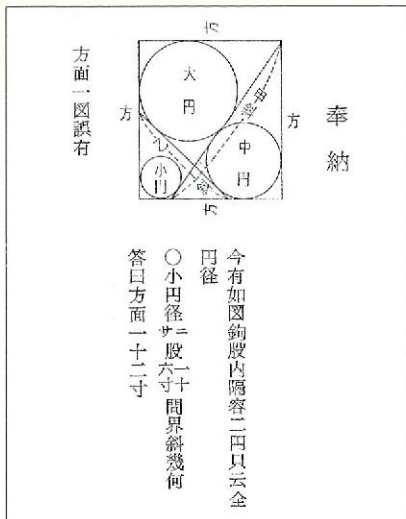
和算の大家

◆後藤美之 (1783~1863)

19世紀の初めごろから、かなりの数の農民が和算（日本で発達した数学）を学び始めました。

農民は、納める年貢を計算しなければなりません。また、稲を日照りの被害から守ったり、米の収穫を増やしたりするために、ため池や用水路などをつくる必要がありました。そのためには、容積や角度などの計算が必要でした。このようなことから、農民は和算を学ぶようになりました。

大池村の後藤美之は、和算を学び研究するかたわら130人余りの門人を教えました。大日本報徳社の社長になった岡田良一郎も門人のひとりでした。



円の直径を求める方法

国学者

◆八木美穂 (1800~1854)

八木美穂は、今から約200年前に浜野村（大坂）で生まれました。

国学者（古い時代の日本のことを調べる学者）となり、和歌や俳句をたくさん作り、横須賀藩の文学教授長（学校長）となりました。



八木美穂 肖像(平野素芸筆) [幕末国学者八木美穂傳]より



八木美穂 石碑(美穂園 浜野)

江戸時代の国際人

初めての日露辞典をつくった

橋 耕斎 (1821~1885)

耕斎は、掛川藩士で1855年、海外渡航の禁を犯してロシアに密出国しました。ロシアの外務省に勤めながら、大学で日本語の教授になりました。1857年に初の日露辞典を刊行しました。

ロシアで日本や日本国民の生活を紹介したり、ロシアを訪れた日本の外交団の接待にあたるなど、幕末の日本とロシアの外交に大きな役割を果たしました。



橋 耕斎

オランダ使節

ゲイスベルト・ヘンミイ

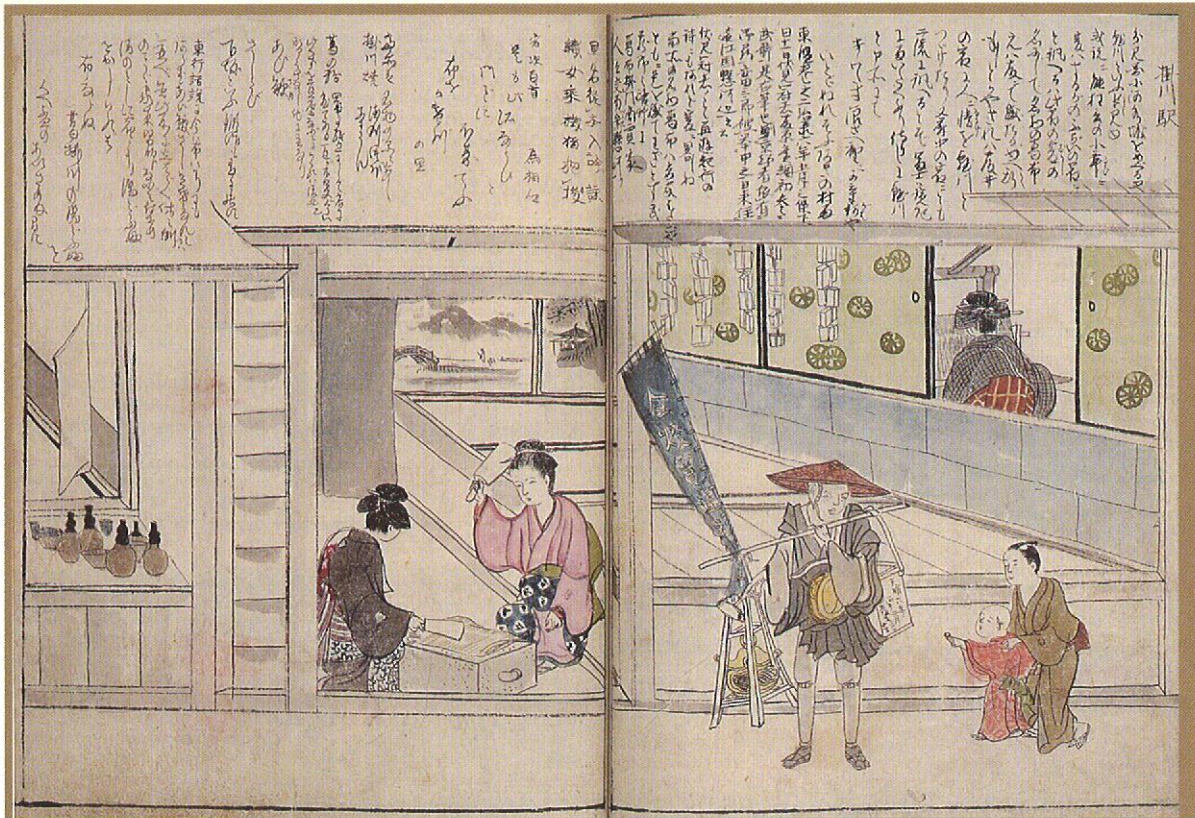
長崎出島のオランダ商館長だったヘンミイは、1794年と1798年の2回将軍に面会するために江戸まで旅をしました。

2回目の旅の江戸から長崎に帰る途中に掛川宿で病死し、天然寺に埋葬されました。かまぼこの形をした墓石の表面には、オランダ語でヘンミイのことが記されています。



天然寺前のヘンミイの墓

◆東海道五十三次品川宿から数えて26番目の宿



江戸時代の葛製品をつくる店の図(『東街便覧図略』名古屋博物館所蔵)
葛の繊維をほぐしたり、布を織ったり葛粉を干している様子が描かれた1786年の絵です。

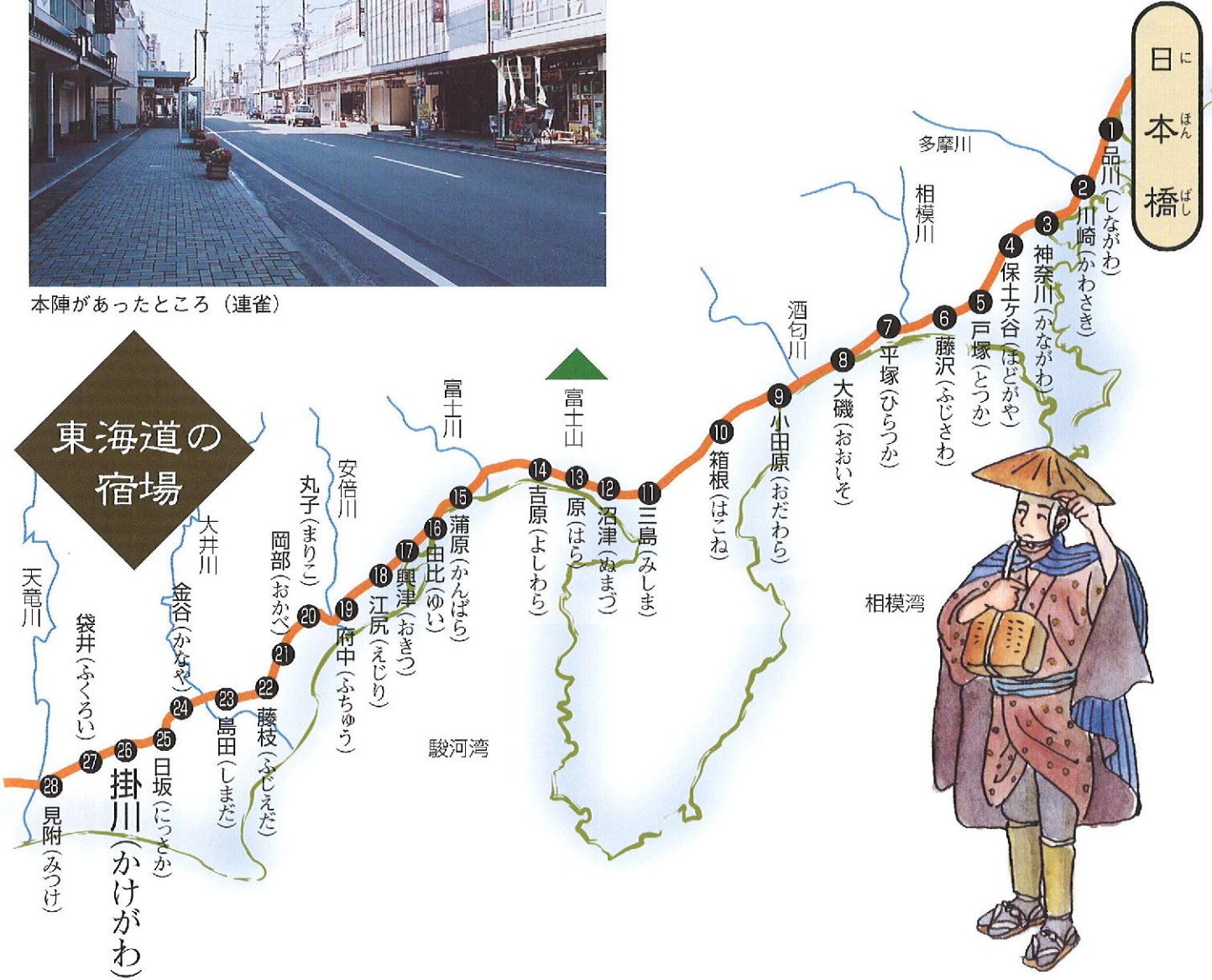
1601年、徳川家康は、公用の荷物を馬に付けて次の宿まで輸送させることにし、宿に馬を備えさせました。これを伝馬と呼び、その仕事を行うところが問屋場です。参勤交代の制度などにより、大名などが休憩や宿泊をする本陣や脇本陣が整備され、商工業の発達などにより商人などの交通量が増えると、旅籠屋が整備されるようになりました。

宿は、東海道を行き来する人や物でにぎわい、東海道を通して文化や情報などが伝えられました。

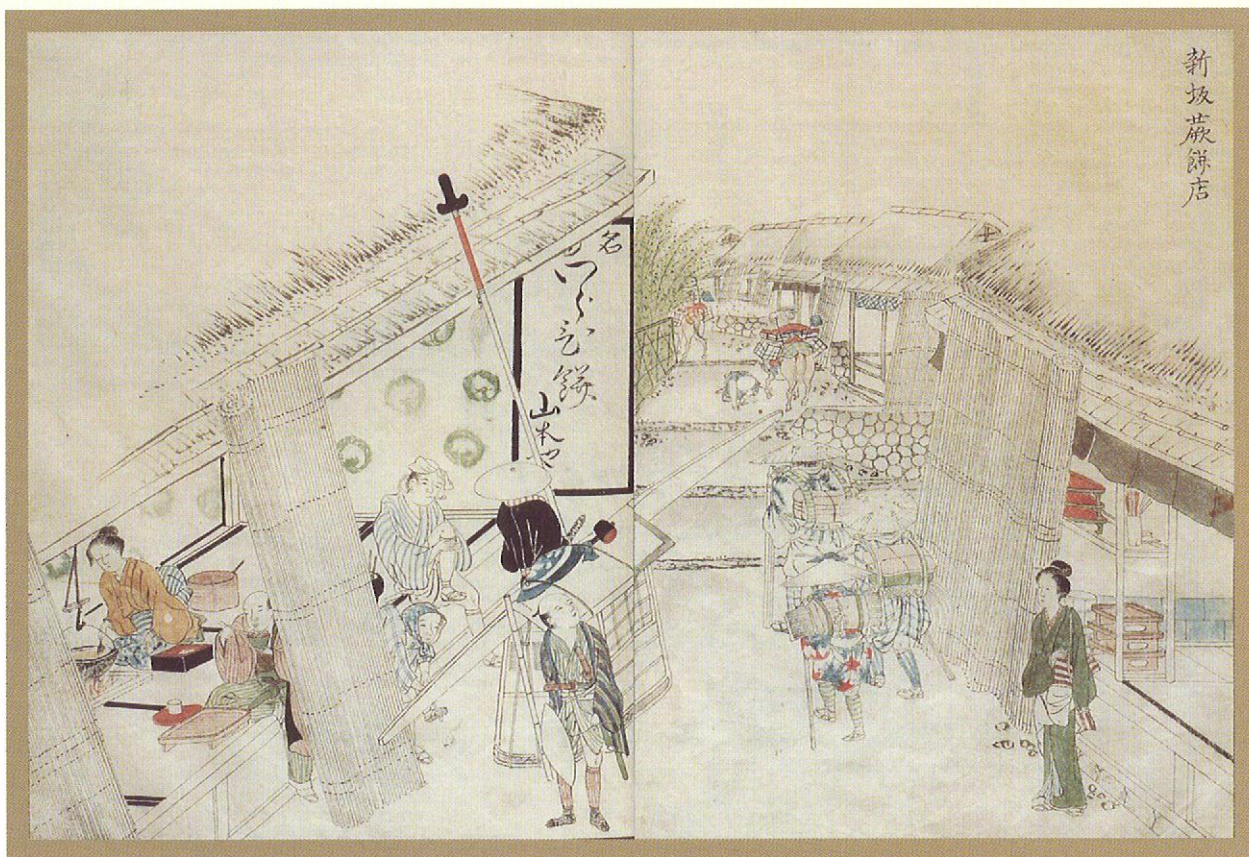




本陣があったところ (連雀)



東海道の宿場



1786年に描かれた日坂宿のわらび餅店と東海道の様子(『東街便覧図略』国立国会図書館所蔵)



当時の姿に復元された川坂屋



川坂屋ボランティア

土・日曜日には、ていねいに川坂屋の歴史や室内を案内していただける方がいます。



ひろしき 広敷とみせの間

川坂屋は、日坂宿で江戸時代の面影を残す数少ない建物です。江戸から大工の棟梁を招いて建てたといわれ、精巧な木組みと細かな細工、格子は、江戸時代の職人の技を物語っています。

また、上段の間をもち、身分の高い武士や公家などが宿泊したようです。

旅籠屋として、明治の初めごろまで続けられました。

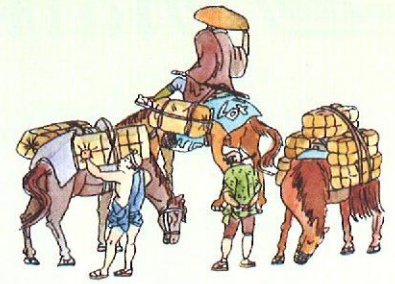


江戸時代の職人の細工がみごとです



かまど

◆旧東海道、小夜の中山峠



茶亭跡

1600年、掛川城主山内一豊が、久延寺境内に茶亭を建て、会津（福島県）の上杉景勝討伐に向かう徳川家康をもてなしました。



藤文

江戸時代の終わりに、日坂宿の問屋役を務めた伊藤文七の邸宅跡です。



常夜燈

常夜燈

常夜燈

常夜燈

常夜燈

常夜燈

常夜燈

常夜燈

常夜燈

常夜燈

事任八幡宮



涼み松
松尾芭蕉が大きな松の木の下で句を詠みました。この周辺の地名を涼み松といいます。



夜泣石

シーボルトも食べた峠の子育て飴



シーボルトは、長崎出島のオランダ商館長付きの医師として来日したドイツ人の医師で博物学者です。1826年、オランダ商館長に従い江戸まで旅行をした帰りの記録に、「伝説の山、日坂峠を歩き、峠の茶屋で茶を飲み飴を食べて、元気を取り戻した。丘の連なるすばらしい景色をながめ、かわいらしい山の娘と楽しい言葉かわし、指輪とかんざしを彼女にやった。」とあります。次の日、シーボルトは掛川にいる戸塚静海の兄を訪ねています。シーボルト著『江戸参府紀行』平凡社『東洋文庫』より